

# 講演会要旨

開催日：2013年11月6日

会場：神奈川大学 23-307

講演者：越智啓太氏（法政大学文学部教授）

演題：「犯罪と心理の最前線の研究について」

犯罪心理学の中でも特にプロファイリングの現場の話や実際問題についての講演が行われた。

プロファイリングとは、犯罪捜査において、犯罪の性質や特徴から、行動科学的犯人の特徴を推論することを指す。統計学を駆使した行動科学の手法で、確率論的に可能性が高い犯人像を示すもので、捜査を効率的に進める支援ツールの一つである。犯罪の特徴、たとえば犯罪の種類、犯罪前の準備、犯罪の方法、犯罪の行動は、犯人の性格や個性にかなり関係すると考えられている。そこで、犯罪現場に残された手がかりを活用すれば、犯人の性別、職業、年齢、社会階層などの特徴をある程度推定できる。その推定をてがかりに捜査すれば、捜査がより効率的になると考えられている。

越智氏は警視庁科学捜査研究所で日本のプロファイリングの最前線にいた経歴があり、近著『ケースで学ぶ犯罪心理学』では実際の犯罪事例をもとに犯罪者の行動傾向を詳しく紹介している。TVドラマの慣習やTV番組のコメンテーターなども務めており、日本のプロファイリング研究・実践の第一人者の一人である。

越智氏によれば、プロファイリングの方法は大きく分けると二つの方法があり、それぞれの特徴と実際問題が紹介された。方法の一つはFBIがはじめた「秩序型」と「無秩序型」に分類する臨床的プロファイリングである。この方法では計画犯罪を「秩序型」、突発的な犯罪を「無秩序型」と分類する。研究方法は犯罪者への面接調査が中心で、研究者自身の個人的な洞察を多く含む方法である。もう一つの方法は、イギリスから始まった統計的プロファイリングでリバプール方式とも言われている。心理学と統計学をもとに確立させたのが特徴である。

日本では1990年頃からFBI方式、リバプール方式のそれぞれについて研究が行われ、プロファイリングの弊害（プロファイルが犯人像の限定につながって逆に真犯人から遠ざかる、など）なども考慮しながら、よりよい活用について検討が行われている。

講演では最後に質疑応答が行われ、越智氏は聴衆者からの質問に時間を超えて対応してくれた。

（文責 杉山崇）

開催日：2013年10月24日

会場：23号館304

講演者：石原 悟（元コナミススポーツ会長）

演題：フィットネス産業の成長プロセス

そもそも従来からのフィットネスクラブ産業は、施設内において健康や快適性を売るサービス産業として展開されてきた。昭和50年頃に日本で産声をあげた比較的新しい産業でもある。会員の定着率低下やサービスのマンネリ化などの課題が山積し、ここ数年間は成長が鈍化する傾向にあった。

演者の石原氏は、フィットネスクラブの草創期にピープル（後にコナミススポーツに買収）を立上げ、

その後 FIA（フィットネス産業協会）会長としてフィットネス産業界を牽引してきた。その経験から現状の課題と今後の展望について話しを伺った。

近年、健康志向を背景に中高齢者を中心に日本のスポーツ人口が拡大しつつある。さらに 2020 年東京オリンピックの開催が決定したことで、スポーツ産業全体に明るい兆しが見え始めた。五輪を見据えたインフラ整備、特に公共スポーツ施設が飛躍的に整備されることは確実だ。指定管理者制度や PFI 事業への参入など官民連携事業がスポーツ界にも大きな影響を及ぼし、フィットネス産業界にも大きなビジネスチャンスとなる。さらに地域活性化事業や街づくり事業への参入、福祉施設や高齢者施設との連携による新たな事業展開が模索されるであろう。そのためには、単なる健康づくり事業の専門家ではなく、社会全体を見渡せるマネジメント能力を持った人材の育成が重要だ。ここに参加の学生にもそのような人材として活躍してもらうことを期待したい。

（文責 大竹弘和）